

---

# 意中之人

ゆチャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

意中之人

### 【Zマーク】

Z2956F

### 【作者名】

ゆチヤン

### 【あらすじ】

恋の一歩。それは君の言葉から。

今はまだ。（前書き）

昔の人は難しいことを言つ。

今はまだ。

昔の人の言葉で

『恋ははしかと同じで、誰でも一度はかかる。  
なんて、よく言ったもんだと思つ。』

高校2年の今の時期

周りはカップルだけで

友達曰く、今が一番楽しい時期らしい。

はしかと同じ恋を一度もしたことないあたしは  
きっと、異端なかも知れない。

夏休み少し前の7月頭。

テストも終わって

あとは適当に授業を受けてればいいこの時期は  
学校事態来る人が少ない。

うちの高校は午前中から選択授業とかがあるから  
全員が来る訳じゃないんだけど。

「小野一」  
「んあーい」  
「何だその返事はー」  
「考え方してたんですねー」

小野愛梨、16歳。

愛なんて恋も知らないあたしに付いた名前。

正直迷惑たつたりする

まあ、親を恨む訳いかないけどね。

「可愛くなーぞ、その顔

「アラモードは二つ、平穏ですか？」

「同上」  
—  
—

「先生、あれですよ。生徒がいつまでも

駄目です

「あはは、小野黒いぞ。先生心臓痛い痛い」

卷之三

第一回 がんの御内侍が御内侍の御内侍

先生 まさかそれ持つてけなくて言ひへり

「そのうわあつて顔やめろ」

あたし今から帰ってきて家の手伝いする予定なんですよ

「三三兩二」，「一」者，指一株多生於原野，「三」者，指三株多生於原野。

「ほら、今の時期つてカツプルばつかじやん?暇そうなのつて独り

身の一

先生田田たけりく前中たけりかく一を屋で食あこ  
一へかさいれ

わたしは先生はそこへと

先生が持っていた資料やら地図を持ってその場を離れた。

範の中にはその田一田分の参考書とハート

それに足して資料やら地図やらでかなり重い。

「先生まで、独り身なんて言ひとなこのことを

社会化倉庫はそこから結構遠い。

階段を降りて、隣の棟に行つて、その棟の一一番上。  
エレベーターはあるけど、お年寄りの先生や大きい機材を運ぶ時  
か使つちゃいけない。

これは明日先生にお昼ご飯とデーター付けてもらわなきやだ。

鍵はいつでも開いてる社会化倉庫

渡部先生が適當だからか知らないけど

結構汚い。

埃まみれだし、片付いてないし。

「よし、これでおく

その周りだけ整えてあたしは社会化倉庫を出た。  
なんてーか

「なんてーか寂しいもんだねえ」

「・・・

「ひにちわ、小野愛梨ちゃん」

あたしの脳内の言葉を遮ったように言葉を述べた男は  
廊下の柱に背中を預け、あたしの名前を呼んだ。  
金色の髪に、170㌢以上はあると見える男。

「何か?」

「ん？ ただ一人で寂しそうだなって」

「・・・寂しくなんかない」

「嘘付いてる」

「は？」

「愛梨ちゃんは今嘘付いてる」

「・・・付いてなんかないよ」

「つづん、付いてる」

「何でわかるのよ、そんな」と

「・・・すつと見て来たから」

「・・・？」

「ずっと愛梨ちゃんの」と見てきたんだよ」

「・・・あたし、あなたの名前さえ知らないんだけど」

「同じクラスの、深山流だよ」

「深山、流」

「・・・これからは俺が愛梨ちゃんのやばいやつとこねよ」

そうやって、  
抱き締められて、  
あたしは一瞬頭の中がショートした気がした。  
『恋ははしかと同じで、誰でも一度はかかる。  
はしかと恋は同じ？誰でも一度はかかる？  
どんなかかり方の恋だつていいのかな。  
誰か教えてよ。

好きだつて言われた訳じゃないのに

こつもドキドキするもんなの?

恋つて一体何なの?

ねえ、流は恋を知つてゐるの?

「・・・」

「・・・これから一歩ずつ進んでいく?」

その言葉に何故か頷けたのは、

きっと、流の所為だ。

今は、好きじゃない。

ただドキドキしてゐるだけなんだ。

## 今はまだ。（後書き）

どうせ毎度ゆチャンです。

他の2つは恋愛とはけよつと違った感じなので  
これはあくまでも『恋愛・愛情』をテーマにして  
書いていきたいなと考えております。

他の連載も書きます、すいません。orz

メールフォーム作りました。

何かあればどうぞ。

<http://www.formzu.net/genex?ID=P83852656>

## 繋いだ手。（前書き）

何が起きたのかわからなかつた。  
でも、これはまだまだ序章に過ぎなかつた。  
・・・なんて、シリアルスジじゃないよ？

## 繋いだ手。

『ずっと愛梨ちゃんの「」と見てきたんだよ』

「……………いつたあ…………」

「愛梨あんた何やつてんの」

「お姉ちゃん」

「あんた帰つて来てからおかしいわよっ」

帰つて来てから……

「や、それは……」

「ん? 何かあつた?」

「な、なんでもないけど」

あれからじりじりつて帰つてきたんだもん。  
気が付いたら今だつた。

「つて、お姉ちゃん今何時?」

「え? もう〇時過ぎてるわよー」

「・・・あ、明日朝からだ……寝なきや」

「つたくせじこ子ねー」

「おやすみ、お姉ちゃん……」

「はいはい、おやすみ」

お姉ちゃんはあたしよりも10個上の26歳。  
結婚もしてて、うちの事務をしてる。  
うちはおじこちゃんからみんな建築士。  
今住んでる家のそばに建築事務所がある。

お姉ちゃんは結婚してからデザイナーになつて、事務をして、田那さんをサポートしてゐるんだって。お姉ちゃんは結婚した時に家を出て田那さんと一緒に住んでるんだけど

近いからたまに泊まりにくるんだ、勿論田那さんも一緒にね。

少しだけ眠気に襲われる中、携帯が光つた。

開くとそこには『流』の一文字。

デヤドキしながらそのメールを開くと。

『Date : 7/9 0:38

From : 流

Sub : 明田

1現からだよね?なら一緒にいりまへ

朝迎えに行くよ。それじゃあおやすみ、愛梨ちゃん』

「・・・迎えに?何で?知つて・・・あ」

そうだ、思い出した。

流と一緒に帰つてきたんだ。

「愛梨ちゃん、緊張るのはわかるけども少し離れないで歩けない?」

「む、無理!」

「わ、なら」

流は気付くとあたしの隣りに立つていて、あたしの右手を取つていた。

「「れなら、大丈夫でしょ？」

「「」嬉しそうに笑つて

「「」の心臓を考えてほしいわ！」

「「」しょ、緊張して寝れない」

「「」・・・愛梨ー？」

「「何、お姉ちゃんー」

「「寝れないのー？」

「「うーん」

「「んじや下來なさいなー」

お姉ちゃんがそう言つて階段を降りていく音が聞こえた。  
あたしは携帯を持つて部屋を出る。

「「あ、真之介さんおかえりなさい」」

「「ただいま、愛梨ちゃん」」

「「真之介、聞いてよ。」」の子悩みあるみたいなの」

「「悩み？」

「「そ、悩み。しかも恋の悩み」」

真之介さんはお姉ちゃんの旦那さん。

お姉ちゃんよりも2つ年上であたしより1-2個上。

「「」恋ー？何で恋なんてしてないよー？」

「「」んじやー今日一緒に帰つて来たのは誰？」

「「」見たの？」

「「人聞き悪いわね、見えたのよ」」

「「」・・・あ、あれは」

「「誰？」

お姉ちゃんは時々威圧的だ。

「」でお姉ちゃんと真之介さんに事情を話した訳だけど・・・。

「その流つてこいつがあんたの想い主な訳ね？」

「べ、別に想つてなんか・・・」

「ふーん、で何が気になるわけ？」

「・・・見てたってだけで、好きって言われた訳じゃないし。それに、あたしは好きかわかんない

「・・・なんで？」

「言われたことが嬉しいだけなのかも知れないじゃない？」  
「確かに愛梨ちゃんの言ひ方とも一理ある」

お姉ちゃんも真之介さんも真剣に聞いてくれた。

まだ、流と話した時間はいくわざかで、あたしは流のことを殆ど知らない。

「時間はたつぱりあるじゃない？」

「・・・やうなのかな」

「せつしき自分で言つたじゃない、好きって言われた訳じゃないって「流くんが本物の愛梨ちゃんの」とを好きなら待つてくれると思つよ。」

「流があたしを待つ？」

「うん、愛梨ちゃんが流くんを知る時間」

流はあたしに

『これから一步ずつ進んで』?』と言つた。

今まだ、好きじゃないんだ。

でも流が抱きしめてきた時、あたしは確かにドキドキした。  
今までにない胸の鼓動。

あれは何だったの?

それからもお姉ちゃんと真之介さんは話を聞いてくれて  
気付けば時計は2時近くを指していた。

あたしは部屋にすぐ戻つたけど2人はまだ何か話していたみたい。

「本当青臭いわ、あの子」

「今までにしたことない経験に困惑るのは誰でも一緒だよ」「確かにね。でもこれで少しは進んでくれるといいんだけど」「流ぐんが折れるのが早いが、愛梨ちゃんが惚れるのが早いが」「あの流つて子、どつかで見たことあんのよねー」

2人の会話なんて知らずにあたしは夢の中へ。

「・・・眠い」

「愛梨そんな顔してないで、わざわざと食べなさい」

「あい」

「美里も眠そうな顔しないで、わざわざと片付けて」

「はーい」

結局あたしもお姉ちゃんと真之介さんも寝不足で。  
朝からお母さんは機嫌悪そうだった。  
お父さんと真之介さんは少し早いけど出社したみたい。

「愛梨ー」

「何ー?」

「流くん何時に来るんだってー?」

「えっと、8時15分くらいだって」

うちから学校まではこつも歩きで30分。

1現から選択授業の時は朝HMRがないから時に教室にいればよい。

「あんた髪ボサボサじゃない。ほら座つて直してあげる」

「う、うん

「いい? 今日からあんたは昨日の自分よりも少し前に進んでるのよ

?」

「進んでる?」

お姉ちゃんはあたしの髪を整えながら、そう言へ。

「そばには流くんでこいつ野の子が常にこるの。そして流くんを知つていかなきやいけなー」

「うん、わかつてる」

「あんた自身も変わらなきやいけなーのよ」

「変わる?」

「流くんにもつと好きになつてもいいんだけあるの」

「・・・流に」

「その為にも服装とか髪型とか化粧とか色々配りなきやいけない」とは言ひあるのよ?」

勿論内面もねーとお姉ちゃんは付け足す。

あたしは地毛が茶色だから染めた」とは一度もない。

長さんは胸のあたりまで。

暑い時は結ぶけど普段はそのまま。  
制服はリボンを結構緩めにして、  
スカート丈はそれなりに短め。  
化粧は本の少しする程度。

「まあ、あんた地はそれなりにいいんだから少し仮配の程度でいい  
のよ」

「……うん、わかつた」

「はい、出来た」

お姉ちゃんはあたしの肩をほんと叩いた。

あたしは田の前の鏡を見ると、驚いてしまった。

「え、何これ」

「似合つてんじやない、」の髪型

「あ、ありがとう」

お姉ちゃんは少し誇らしげにしてる。

あたしの髪はお姉ちゃんにこじられたおかげで  
みつあみチックになつてる。

「愛梨、これあげる」

「これ時計?」

「あたしが高校生の時に使つてたやつ」

文字盤が薄いピンクで小さい腕時計。

お姉ちゃんはそれをあたしの左腕に巻いた。

「これね、あたしが経験したこと何もかも知つてるので

「何もかも？」

「そう、初めて付き合つた人のこととか、友達と喧嘩した時のこととか」

「・・・」

「ふと辛くなつた時にこの時計を見ると、この銀色の針は止まることが多い」

「そりや時計だからね」

「・・・このまま時が止まればいいのに、そうすれば辛いこともかも今この時だけなのにつけて何度も思った」

「・・・」

「けど、それは通用しないのよ。それを思い知られるの、この時計を見るとね」

お姉ちゃんは何処か寂しそうにしてあたしの部屋を出て行つた。

時計は時を刻み続ける。

止まることなく、勿論戻ることもなく。

例え何があつてもこの時計を見て、前に進めるよつこ。

流はメール通り8時15分に家に来た。

嬉しそうに「へへへ」と、何かまぶしいんだだけじゃ

「流くん、うちの妹のことよくじくね？」

「あ、はい」

「お、お姉ちゃん中入ってよー。」

「つむせこわねー、少しへりへりこじちゃんね、流くん

「・・・はは」

お姉ちゃんはニヤニヤしている。

あたしは流はそのまま学校にへりへりとした。

「やつぱり流くんじつかで見たことあるわ」

お姉ちゃんの呟きも知ります。

歩き始めて数分、会話がなくて困る。

何か話しかけたまづがいいんだからうなづ、何も話していない。

「・・・愛梨ちゃん、今口お皿は？」

「お皿？あ、渡部先生に奢つてもううつ約束している

「やつか、一緒に食べてもいい？」

「・・・」

や、やうだよ、これも普通なのは愛梨ーー  
このへりへりでキドキドキしてじつはあるのトーー

「う、うん。勿論いーよ  
「ん、よかつた」

いつもの流、  
本当に嬉しそう。

あれ、でもそりゃいえば

「ね、  
流」

「ん? どうかした?」

卷之三

頬が暑い。

言いたいが言いたくならぬかな。  
恥ずかしくて言葉が出てしない。  
右手が宙に浮いてる。

「あ、手？」

「昨日緊張してたみたいだから、無理強いはしたくないし」「え、あ、そつか」「繫きたかった?」「そ、そんなことないわよー!」

とは言つてみたものの。

繋ぎたかったのが正直なところのかも。

「無理かね」など云ふ、廢梨ぢやん。おつべつでこいつに会つたよ

「う、うん」

流はそう言つて隣りを歩いている。  
手は繋いでないけど、ぴったり横に。

「あ、愛梨ちゃん」

「な、何?」

「髪型につもと違つね」

「これ、お姉ちゃんがやつてくれて……」

「やつなんだ、可愛い」

流のおつきに手が頭に触れた。

「……」これは撫でてること……?

しかも可愛いって……

お姉ちゃん、真之介さん

あたしは登校中だけでも既に白旗です。

どうしよう、流はきっと天然なんだ。

可愛いってすんなり言えちゃう男の人ってどうなの?  
もう心臓バクバクだし、何言えばいいかわかんないし、  
どうすればいいのよ……  
助けてお姉ちゃん……

## 繋いだ手。（後書き）

ゆちゃんです、じりも。  
何か1話からして加速気味な愛梨ちゃん。  
流くんは常に二口二口な子（の予定）  
これからが愛梨ちゃんにとって大変ですww

### メールフォーム

<http://www.formzu.net/forget/ex?ID=P83852656>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2956f/>

---

意中之人

2010年10月11日01時24分発行